

第2章 梓川流域（松本市西部）の土砂災害

梓川流域（松本市西部）の主な土砂災害年表を表 2.1 に、災害の発生位置図を図 2.1 に示します。

また、梓川流域の主な災害事例の詳細については、2.1 項～2.5 項に各論を示しています。

表 2.1 (1/2) 土砂災害年表

本冊子で取り上げた事例

天然ダムを伴った事例

位置	和暦・西暦	発生地点 「名称・通称」	誘因	災害概要	出典
①	宝暦七年 五月六～十日 (1757 年 6 月 22～26 日)	松本市安曇 「トバタ崩れ」	降雨	四月下旬から降雨が続き、五月八日夜明け頃、旧安曇郡大野川村の「とばた」で山崩れ、梓川を堰き止め天然ダムを形成した。湛水は上流 2 里（8km）余。この天然ダムが 2 日後の十日巳の上刻（10 時頃）に決壊し、洪水は下流を襲った。上波田村では竜島全 13 戸流失、赤松 31 戸流失、8 戸浸水するなど大きな被害が発生した。	※1 ※2
②	天明二年 六月 (1782)	松本市安曇 「シブナギの崩壊」	降雨	大野川村（松本市安曇大野川）の前川右岸で発生した大規模崩壊（シブナギ）が前川を堰き止め、人家 33 軒が流失。対岸には「突き上げの原」と呼ばれる平坦地がある。	※3
③	明治 29 年 (1896) 7 月 23 日	松本市奈川 「角ヶ平災害」	降雨	12 日間豪雨が続き、八木沢日向山崩壊、大示川（奈川）で堰き止め湛水し決壊。角ヶ平で民家 6 戸、角ヶ平分教場、秀綱神社埋没、12 人死亡。	※4
④	大正 4 年 (1915) 5 月 6 月 5～6 日	松本市安曇 「大正 4 年焼岳噴火」	火山	焼岳小噴火。下堀沢を泥流が流下、梓川を堰き止め小湖形成。	※5
				5 月に形成された小湖の湖尻が小決壊。午前 8 時頃、下流の島々で水濁と流木を確認。	※5
				焼岳噴火。上高地で連続 3 回の地震発生、3 回目の地震時、中堀沢に長 270m、幅 35m、深さ 18m の亀裂を生じ、数個の火口から噴煙、泥流を噴出。流下した泥流は霞沢岳麓まで達して梓川を堰き止め、長さ約 1700m の大正池を出現させた。梓川を堰き止めた天然ダムは幅 330m、高さ 4.5m であった。	※5
⑤	大正 14 年 (1925)	松本市安曇 「焼岳噴火」	火山	小～中規模の断続的噴火。	※6
⑥	大正 15 年 (1926)	松本市安曇 「中堀沢の崩壊」	降雨	豪雨により中堀沢で大崩壊押し出し、梓川を堰き止めた。周辺からの土砂流入と天然ダム堤の侵食低下によって大正池は年々縮小していたが、この堰き止めにより上流へ拡大、現在の上高地温泉付近まで達した。	※5
⑦	昭和 20 年 (1945) 10 月 5～10 日	松本市奈川 松本市安曇 山形村 「昭和 20 年災害」	降雨	秋雨前線と台風による豪雨。6 日、田ノ萱公会堂付近の山が崩れて押し出し、2 人死亡。9 日、大洪水となり、特に寄合渡の被害甚大。寄合渡分教場校舎は半分流失。黒川も氾濫した。	※4 ※7
⑧				島々谷川の上流左岸の大ナギなどが崩壊し、風呂平などで島々谷川を一時的に堰き止め、それが決壊したことで土砂洪水が下流を襲った。島々地区では、10 月 10 日、流失 11 戸、一部流失 3 戸、埋没 27 戸等の大きな被害が発生したが、幸い人的被害は発生しなかった。また、島々集落から梓川沿いに約 800m 下流、野沢のタカツナギでは、9 日に大きな崩壊が発生し、6 人が死亡した。崩壊斜面下には、慰霊碑が建立されている。	※8
⑨				山形村の三間沢川源流、堂ヶ入沢でも山崩れが発生し、濁流が上大池豆沢方面へ流れ浸水した。この時の防災活動で、上大池警防団の 2 人が殉職した。丸山に殉職之碑（写真 2.1）が建立されている。	※9
⑩	昭和 37 年 (1962) 6 月 17 日	松本市安曇 「昭和 37 年焼岳噴火」	火山	焼岳噴火。中尾峠付近から南西方向に割れ目噴火が発生。噴石により焼岳小屋倒壊、従業員 2 人負傷。泥流は峠沢に沿って大正池畔に達した。この災害により、旧中尾峠を通る登山道を 300m 北に移設、新中尾峠とした。焼岳小屋も現在地に移転。	※5 ※8
⑪	昭和 41 年 (1966) 6 月 11 日	松本市安曇 「ズミの窪の崩壊」	降雨	大雨により旧安曇村のズミの窪で大規模な山崩れ。土砂量 10 万 m ³ 。上高地へ向かう観光客 1,000 人足止め。	※10
⑫	昭和 42 年 (1967) 7 月 9 日	松本市波田 「昭和 42 年豪雨災害」	降雨	梅雨前線による集中豪雨。1 日雨量 80mm。黒川支流の西よもぎ沢が押し出して黒川を堰き止め、黒川林道 200m 流失。	※11

表 2.1 (2/2) 土砂災害年表

本冊子で取り上げた事例

天然ダムを伴った事例

位置	和暦・西暦	発生地点 「名称・通称」	誘因	災害概要	出典
⑬	昭和 50 年 (1975) 7 月	松本市安曇 「昭和 50 年上高地の土石流」	降雨	八右衛門沢、白沢等で土石流発生。県道上高地公園線等が不通となり、1500 人が孤立。ホテル・旅館の一部で床上浸水。	※12
⑭	昭和 53 年 (1978) 6 月 19～22 日	松本市波田 「西よもぎ沢上流の崩壊」	降雨	黒川支流の西よもぎ沢上流で崩壊発生、棚上小屋の上流 300 m 地点に約 10 万 m ³ の土砂を堆積させた。黒川林道は 1000m 余にわたり路面や路肩決壊。黒川上流の六兵衛小屋流失。中下原では農地に被害。床下浸水 21 戸。激甚災害指定。	※11
⑮	昭和 54 年 (1979) 8 月 20～25 日	松本市安曇 「昭和 54 年上高地の土石流」	降雨	上高地地区で土石流が多発。八右衛門沢の土石流によって県道が約 100m 土砂で閉塞。中の湯付近のつばくろ沢で土砂流出。県道上高地公園線は 1 週間不通となり、観光客 4000 人が孤立。	※12
⑯	昭和 58 年 (1983) 9 月 28～29 日	松本市奈川 松本市安曇 松本市波田 「昭和 58 年災害」	降雨	旧奈川村の寄合渡では、上流から流出した崩壊土砂や流木により奈川兩岸の堤防決壊、寄合渡橋付近は川原と化した。住宅、公共施設等流失。道路も寸断され、旧奈川村は孤立した。旧奈川村内の被害は流失家屋 12 戸、全壊 7 戸、半壊 2 戸、床上浸水 16 戸、床下浸水 22 戸。災害救助法の適用。	※4 ※7
⑰				大野田地区では本沢から大量の土砂が流出、床下浸水 8 戸。島々地区では狸平の沢から土砂が流出、国道 158 号線を埋没させた。また、島々谷道は崩落と決壊のため寸断、用水路の入口も決壊。橋場地区では大神宮西側の山林から濁流が押し寄せ、床下浸水 5 戸。稲核地区では宮の沢から土石流が流入、床下浸水 5 戸。大野川地区では国道 158 号線と県道で土砂崩落と決壊が発生、乗鞍高原方面が孤立。	※8
⑱	平成 7 年 (1995) 2 月 11 日	松本市安曇 「中の湯の水蒸気爆発」	火山	中の湯の水蒸気爆発。国道 158 号線脇の安房トンネル関連工事現場で水蒸気爆発が発生。噴き上げられた土砂は約 5,000 m ³ と推定され、現場に比高 8m の小丘を形成。この土砂に埋もれ、作業員 4 人死亡し、慰霊碑（写真 2.2）が建立されている。	※5 ※8
⑲	平成 10 年 (1998) 8 月	松本市安曇 「上高地群発地震」	地震	穂高岳～槍ヶ岳付近などで、群発地震と雨による地盤のゆるみにより崩落・落石が起こり、登山道の通行不能発生。	※13
⑳	平成 11 年 (1999) 9 月 15 日	松本市安曇 「釜トンネル災害」	降雨	県道上高地公園線の釜トンネル出口での土砂崩落により 1300 人が孤立。	※12
㉑	平成 23 年 (2011) 6 月	松本市安曇 「産屋沢の土石流」	降雨	大雨により上高地の産屋沢では、土石流が発生。道路が寸断し、観光客ら 860 人が孤立。	※14
㉒	令和 2 年 (2020) 4 月	松本市安曇 「上高地群発地震」	地震	2020 年 4 月 22 日、上高地周辺で群発地震が本格的に始まった。これ以降群発地震によってさまざまな場所で落石が発生した。	※15

※1 松本市安曇資料館（2006）：トバタの山崩れと大水 江戸時代の天然ダムによる災害，58p.

※2 南安曇郡誌改訂編纂会（1956）：南安曇郡誌第一巻，1030p.

※3 南安曇郡誌改訂編纂会（1962）：南安曇郡誌第二巻下，792p.

※4 奈川村誌編纂委員会（1994）：奈川村誌歴史編，627p.

※5 安曇村誌編纂委員会（1998a）：安曇村誌第一巻自然，718p.

※6 松本砂防工事事務所（1979）：焼岳噴火記録，28p.

※7 奈川村誌編纂委員会（1992）：奈川村誌自然編，181p.

※8 安曇村誌編纂委員会（1998b）：安曇村誌第三巻歴史下，833p.

※9 山形村誌編集委員会（1980）：村誌やまがた，697p.

※10 小川一・太田勝己（1970）：上高地への道——般国道 158 号線ダム関連改良工事報告一，土木学会誌，55 巻 4 号，p.12-22.

※11 波田町誌編纂委員会（1983）：波田町誌自然民俗編，703p.

※12 中部山岳国立公園上高地連絡協議会・上高地河床上昇対策検討会（2022）：上高地における河床上昇対策の基本的な考え方と実施方針，23p.

※13 松本市（2024）：松本市地域防災計画，資料・様式・参考編，【資料編】，188p.

※14 松本砂防事務所（2024a）：上高地の砂防，10p.

※15 島津弘（2022）：長野県，上高地谷における斜面－谷底の土砂供給と地震との関係，2022 年度日本地理学会秋季学術大会表要旨

飛騨山脈南部から木曽山脈北部にかけて活断層である境峠断層が分布しています（活断層研究会編，1991）。本地域では図 2.1 に示すように梓川の南側で安房山付近から奈川（寄合渡）を通り、県道 26 号に沿って境峠を越え木祖村へ続きます。

シブナギ（②）や奈川（⑦、⑬）の災害は、この断層による破砕帯で生じていることがわかります。

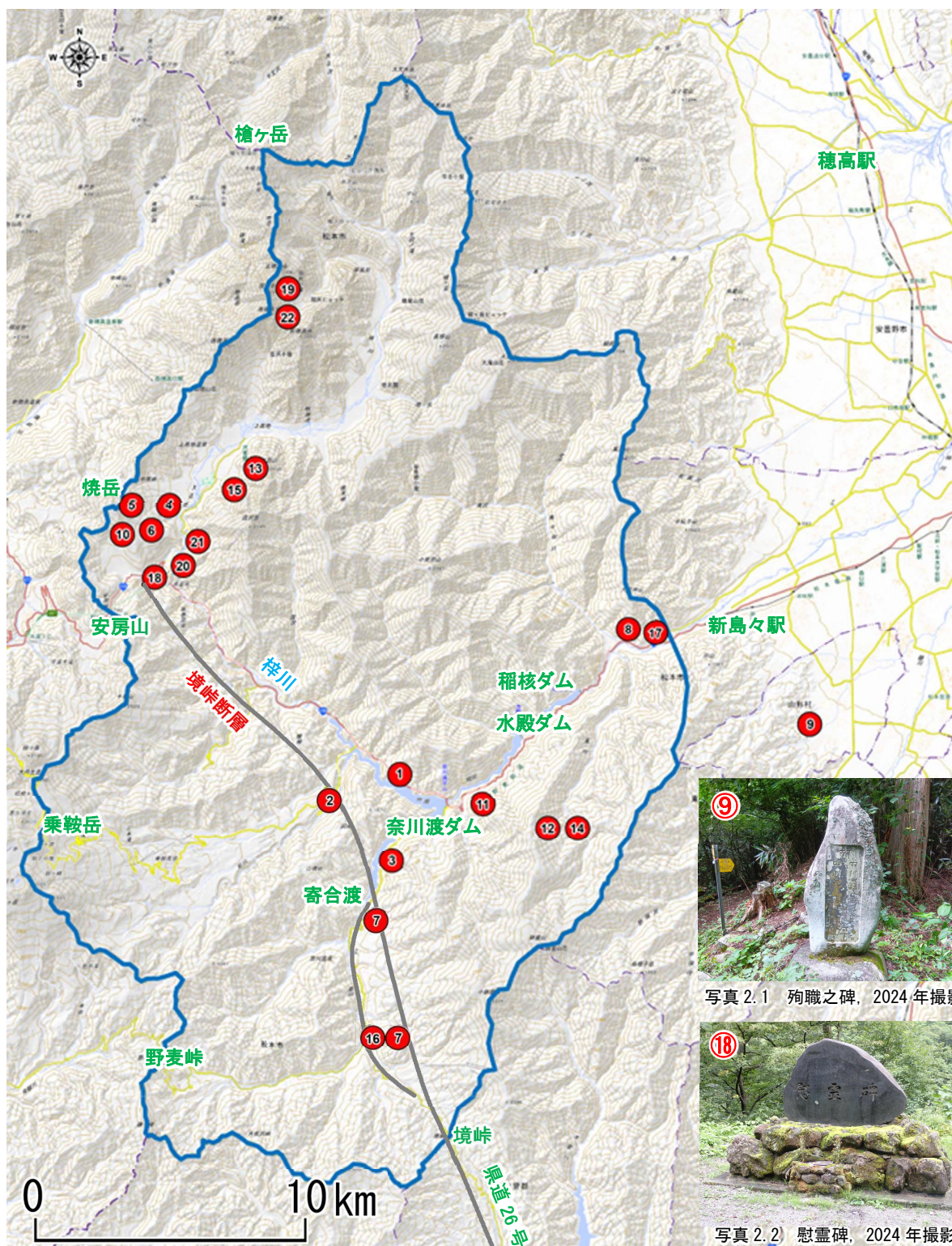


図 2.1 梓川流域（松本市西部）の災害発生位置図（地理院地図「標準地図」に加筆）
※図中の番号①～②②は、表 2.1 の位置番号と対応、断層位置は活断層研究会（1991）に基づく